

# 鳥獣害便り

## やまだのかかし

地域の鳥獣害をサポートするサイトです

編集・発行者：山村 準  
Tel:0595-63-1725  
Email: jyun.y@asint.jp

### 獣害の歴史

#### 平安時代

「平安時代」とは、794年、桓武天皇によって長岡京から平安京に遷都されてから、鎌倉幕府が成立するまでの約390年間が平安時代で、奈良時代と比べると平安時代は、日本独自の文化や政治体制が育った時代といえます。

#### 平安時代の動物観

山際に立地している名張市地方は野生動物の被害にあいやすく、獣害対策を行うために大変な苦勞を強いられています。さらに押し寄せる高齢化や人口減少、後継者不足の問題もあり、中山間地域の農民にとって獣害は死活問題だと言って過言ではありません。

古来より、日本の農・林業は獣害に悩まされてきました。しかし、資材や技術に乏しかった時代に生きた農民たちは、様々な工夫をこらしながら防除を図っていたようです。時代が進むにつれ野生動物の飼育が始まると、人間と害獣といった関係だけではない、人間と動物との付き合いが始まります。



矢田地蔵縁起絵巻  
奈良時代国立博物館



現代の猟師  
マタギ

そして動物は、農耕や軍事の一翼を担い、ときには政治の道具として、また、ペットとして、人間にとってなくてはならない多面的な動物観が育まれてきました。

#### 平安時代の狩猟

日本では古来、食用の家畜を育てる習慣が少なく、主に狩猟で得たシカやイノシシの肉を食べていました。平安時代には陰陽道が盛んになったこともあり、獣肉食の禁忌は強まり、代わって鳥や魚肉が食されるようになり、一時期獣肉離れがあったものの、獣肉食に関する嫌悪感も時が過ぎると共に変わり、

庶民の間では「菓食い」とか「山鯨」など様々な呼び方で食していて、全く食べられなくなつたという時期は見当たりにません。肉食禁断令は平安時代まで繰り返し発令され、狩猟・漁撈にマイナスのイメージを与え「殺生観」が形成されるようになって現在

に至っています。無意味に動物をいじめる遊興狩猟と、食べるために捕殺せざるをえない狩猟・漁撈とを混同することが問題です。東北地方、北海道から北関東、甲信越地方にかけての山岳地帯で、伝統的な古来の伝統を守りながら、森や自然の掟を破ることなく、集団で狩猟を行うマタギという狩猟集団が存在し、大規模な狩を行っていました。また、マタギ以外の古代の猟師でも、自然の掟を破ることなく、森に住む動物たちが「増えすぎても減りすぎでもない」範囲で狩猟を行って肉を得るため以外に、野生動物の個体数を調整するという自然保全上の大きな役割も果たしていました。森に住む動物たちが増えすぎても減りすぎても、森や山は壊れるのです。人間は古代から森の恵みを頼りに生活をしてきました。それは、

現代においても変わりません。また未来においても...

#### 平安時代 貴族と動物

貴族社会の儀式や行事では、支配を象徴する動物として馬、牛、鷹などが活用されていて、中でも馬は重用され権力を持つ者ほど多くの馬を必要とし、多くの馬を抱えて競馬や馬を用いた武芸の披露などが行われていました。牛は農耕や資材の運搬用として主に利用されていたが、貴族の乗り物牛車としても利用



平安時代 庶民と動物

用されていました。鷹狩は遊興として盛んであったが、12世紀になると、貴族は殺生に対して罪悪感や穢れの観念を強め、狩猟そのものが下火になっていきました。

#### 日宋貿易 外来種

平安時代後期、日宋貿易が始まり、珍しい動物や昆虫などが、中国の商人によって持ち込まれるようになりました。日宋間の渡航が解禁され、人の交流が深まるだけで、植物の種子や昆虫の卵などは、人の衣服などに紛れこむなど人知れず、意図すること無く持ち込まれるようになりまし

日本では野外に定着しつつある外来種は、わかっているだけでも約2,000種。我が国の生物多様性が直面する重大な危機の一つとなっています。道端に生えているセイヨウタンポポはヨーロッパ原産の帰化植物。ニホンタンポポを駆逐して、日本各地に生息域を広げ、現在では最もポピュラーなタンポポとなっている。在来のニホンタンポポは減少しています。帰化生物が増えると在来種は減少するのです。帰化植物の中にはセイタカアワダチソウのような「侵略的」な種もみられます。しかし、外来種の中には、農作物や家畜、ペットなど私

ちの生活に欠かせない生き物も沢山います。

※外来種被害

予防三原則

入れない！捨てない！広げない！

平安時代猫は、貴族社会では、希少なペットとして大切に飼われていました。しかし、猫は、既に奈良時代に大陸から伝わり経典などを鼠害から守るために寺社などで飼われていました。ペットとして飼われ始めたのは平安時代からで、猫は富裕族の象徴で、専門の世話係まで付けるほど大事にされていたとい、庶民には高嶺の花だったようです。

鹿激増

深刻化

日本では、シカの個体数は、時代によって増減を繰り返して、拡大の途をたどっています。その原因はひとつの単純なものではなく、様々な要因が絡み合っています。しかし、最もシカ激増のおおもとは拡大造林だと思

ます。

拡大造林政策

「拡大造林」とは、戦後の復興に伴い木材需要が増加すると、国内での木材生産が推進されました。政府は、1950年代から60年代にかけて、木材の安定供給を図るために山林を開拓し、建築に有用なスギ・ヒノキを主とした大規模な人工林を造成しました。これが戦後日本の「拡大造林政策」です。それまであった天然の広葉樹の森を皆伐し、一面はげ山となった山には、スギやヒノキの苗木が大量に植樹されました。高い木が切り倒され、日当たりがよくなり雑草が繁茂し山林が牧場化したことや、植樹されたスギ・ヒノキの稚樹は、20年間ほどはシカにとっては大量のエサとなりました。

天敵の不在

かつての日本には、シカを捕食するニホンオオカミ（以下オオカミと表記）が1900年代初頭まで生息していましたが、感染症の流行や、家畜被害対策による駆除などによ

て、絶滅しています。自然界に天敵がおらず捕食圧がないことが、シカの生息数増加の一助となっています。

降雪量の減少

昨今の地球温暖化によって冬季の積雪量が減ったことは、自然界にも影響を与えています。シカにとっては、豪雪がなくなったことで冬季も充分な餌を食べられるようになり、自然減の原因となっていた冬季の豪雪によるエサ不足が軽減され、結果として生存率が上がっています。

捕獲禁止措置

かつて、シカは絶滅の危機に瀕したことがあり。1900年代初頭までの、食料や毛皮利用を目的とした乱獲によって、全国的に個体数が激減し、地域によっては絶滅したところもあります。その後1950年代までは禁猟、1955年からオスジカのみ解禁され、全国でメスジカが狩猟解禁されたのは2007年シカの捕獲禁止措置シカの捕獲禁止措置年と、つい最近のことです。この規制緩和の遅れも、シカの増加に大きな影響を与えています。

過疎高齢化の進展 狩猟人口の減

過疎化・高齢化が進み、耕作放棄地の増加が全国的な問題となっています。人間がそれまで管理していた土地に人手が入らなくなることで、放棄地が野生動物に生息場所として利用されるようになっていきます。また、里山の荒廃が目立ちます。里山は、人間と野生動物の緩衝帯となっていて、野生動物の人間界への侵入を阻止していたのです。現在では荒廃し野生動物の棲家となっています。



「グリーンライン」が見える

山林の生態系破壊

シカの食害による森林破壊が進み日本の森林は「緑の砂漠」となっています。

シカが増加している原因は、すべて人間の活動が関係しているといえます。時代に合った様々な人間活動が、結果としてシカなど野生動物が繁殖しやすい環境を作り出し、それに適したシカなどが、その個体数を増やして今日に至っているといのが現状です。シカの個体数は、令和7年（2025）には約500万頭にまで増加すると推測され、今以上に大きな被害をもたらす恐れがあるといわれています。温暖化の影響で、シカによる生態系被害が、南アルプスにまで及び、お花畑が消滅寸前の状況で、そこに生息する雷鳥にも絶滅の危機がせまっています。更に、生物多様性保全、景観



水路に網状の柵

兵庫県北播磨県民局HPより引用

また、狩猟人口が減少していることにより、シカに対する捕獲圧が低下していることも、シカの増加を促進する一因となっています。シカの食害による森林破壊が進み日本の森林は「緑の砂漠」となっています。シカが増加している原因は、すべて人間の活動が関係しているといえます。時代に合った様々な人間活動が、結果としてシカなど野生動物が繁殖しやすい環境を作り出し、それに適したシカなどが、その個体数を増やして今日に至っているといのが現状です。シカの個体数は、令和7年（2025）には約500万頭にまで増加すると推測され、今以上に大きな被害をもたらす恐れがあるといわれています。温暖化の影響で、シカによる生態系被害が、南アルプスにまで及び、お花畑が消滅寸前の状況で、そこに生息する雷鳥にも絶滅の危機がせまっています。更に、生物多様性保全、景観

に適應したシカなどが、その個体数を増やして今日に至っているといのが現状です。シカの個体数は、令和7年（2025）には約500万頭にまで増加すると推測され、今以上に大きな被害をもたらす恐れがあるといわれています。温暖化の影響で、シカによる生態系被害が、南アルプスにまで及び、お花畑が消滅寸前の状況で、そこに生息する雷鳥にも絶滅の危機がせまっています。更に、生物多様性保全、景観

保全、災害など国土保全の観点からも、森林の公益的機能全般に大きな影響が出ています。今ある被害を突き詰めて考えるとき、人間の活動が大きく影響している人災と捉えてもいいのかも知れません。シカなど野生動物との共存棲み分けは避けて通れないテーマです。今後は、捕獲数を増やすだけではなく、棲息状態を正確に把握し棲み分け共存への道筋をつけるのが、今を生きる私たちの努めです。

『奈良公園のシカ』

奈良公園の鹿は、約1300年の昔春日大社に祀られている神様（武甕槌命）が白いシカに乗ってやってきたという伝説があり、万葉集（750年）に実際にシカがいたことが書かれています。以降、それぞれの時代ごとに、大切に保護されてきた経緯があり、1957年には、国の天然記念物「奈良のシカ」として指定されました。奈良公園には多くの観光客がシカを目当てに訪れます。しかし、奈良のシカは2度絶滅の危機がありました。一度目は、明治維新の混乱（1873年）によ

チョット一服

て38頭まで激減。二度目は、太平洋戦争（1946年）の影響による食糧難で、鹿の密猟が多発し、79頭まで激減。現在では（令和3年7月の調査）オス217頭、メス806頭、子ども82頭、全部で1105頭が棲息しています。※ディアライン（鹿摂食線）奈良公園では、およそ2m以下は枝葉がなく、見通しの良い林が多く見かけます。これがディアラインです。シカが木の皮や葉っぱを食べる最も高い位置のこと。当然シカの大小で高さのラインは変わりますが、平均2m位。

